

被爆者としてのおもい

大阪ろうあ協会

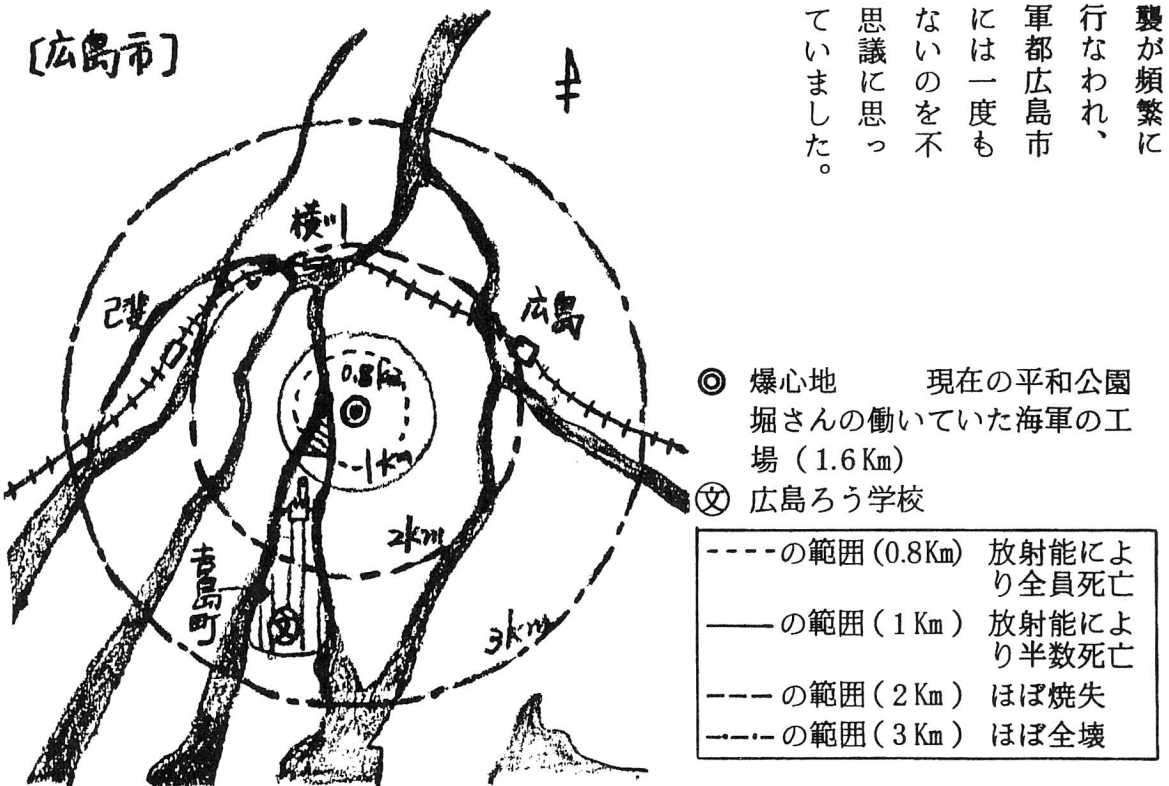
堀 登喜雄

私は昭和二十年八月六日（当時満十九才）爆心地から一・六キロメートルの地点にあった呉海軍工廠指定の木工場（広島市吉島町）で原子爆弾に被爆しました。

その日八時から始業、木工機械を扱かう仕事でした。仕事にかかってすぐに機械のベルトが切れました。そのベルトを継ぐためにしゃがんで、まわりを機械に囲まれた状態でトントンとやっている時に、青黄色いような閃光が走ったと思うと同時に、耳のきこえない私にもはっきりわかる大音響がおこり、なんだろうと立ちあがった頭上から工場の屋根がくずれ落ちてきて、あっと思う間もなくその下敷になりました。

広島市は当時軍都と呼ばれていたような都市ですが、開戦以来この時まで空襲が一度もありませんでした。近くの大竹町（現在大竹市）や呉市には、昭和二十年になると空

襲が頻繁に行なわれ、軍都広島市には一度もないのを不思議に思っていました。



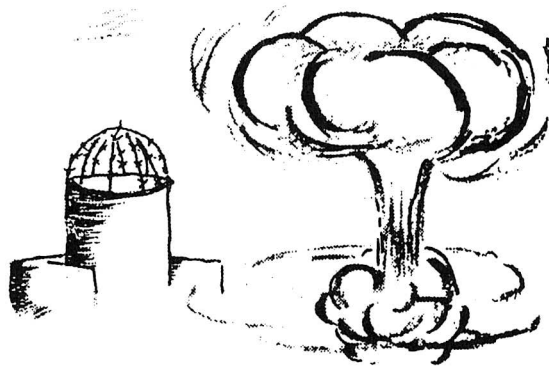
これはあとで知ったことですが、原爆投下には実験的目的もあって、原爆だけの破壊効果、殺傷効果を知るためだったそうです。つまり開戦の時点からすでに予定されていたわけです。

工場の下敷になってまず頭にうかんだのは、「広島市もとうとう空襲されたか。工場がつぶれば家に帰れるだろう」ということでした。広島市の工場に来る前は、山口県の小野田市で姉と暮らしていて、市内の従業員三人ほどの木工場に勤めていました。十九年十二月一日、徴用工として広島市へ来ていたのです。

話をもどしますが、ともかくはやく下敷から抜け出なければ「助けて、助けてくれ」となんども大声で叫びましたが、誰も助けに来てくれません。それは当然のことですが、広島市全体が破壊されつくしてしまったことをまだ知らない私は、それまでにろうあ者なるが故に加えられた仕うち、昼食のベルが鳴っても知らされず、十分や二十分は仕事を続けていることは毎度のこと、作業上の失敗はすべて私のせいになされて、監督に週に二回ぐらい来ていた海軍の下士官になぐられるのもしばしば、こんな場合も見すてられて助けに来てもらえないのだと、おもわず涙をこぼしました。

それでもなんとかはい出してみて、びっくり、びっくりなどと生やさしいものではなく、呆然自失、原爆爆発直後に黒い雨が降ったということですが、その記憶もないほどに、一瞬ポカンとして痴呆症にでもなったようでした。

あたり一面、目をさえぎるものではなく、北方約4キロメートルほどはなれた山陽本線横川駅あたりや西方の己斐



(現、西広島) 駅あたりまで見通せるほど、目につくものは色々な建物の残骸、瓦礫の山、その瓦礫の山のかげなどから人々が現われてきました。私はランニングにステテコ、血と汗と土くれなどで形容できないほどに汚れきっていました。が、それ等の人々とくらべ

ると私が一番マシな姿でした。

顔が二倍ぐらいにもふくれあがった人、男か女か区別がつかない人、胸のふくらみで女性とわかってても皮膚がただれて、若いのか年寄りかわからない人、皮膚がたれ下って幽霊のような人などなど、今、普通の神経を持った人が眼

のあたりにしたら間違ひなく失神してしまふだろうと思えるようなひどい状態でした。私は聞こえないのでわかりませんでしたが、つぶれた家々の下などから、助けを求め、水を求める悲鳴にも似た声が方々からきこえ、とてもこの世のものとは思えなかつたとのことです。

このような状況は、工場の下敷からはい出してから10分ぐらいの間に見たことです。この頃になって、左腕がひどく痛むので見てみますと、二の腕のところでVの形に折れていました。

知った人は誰もいない、どうしたらいいのかとウロウロ歩きまわっていました。そうして人が沢山並んでいる所を見つ、よく見ると前の方で怪我の手当をしているらしいので私も並んで手当を受けたのですが、それはおよそ手当とか治療と言えたものでなく、いきなり左手首とヒジをつかんでひきのばし、ありあわせの板ぎれをあてがい、これもまたありあわせのポロ布で巻いて、ガラスの



破片などでの傷には赤チンをザーッと塗ってそれでおしまいでした。

現在でも左腕は、寒いとき、梅雨などの天候不順なときなどひどく痛むことがしばしばで、ひどいときは、頭痛を伴い、目まいがすることもあります。

手当を受けた後は、私同様行くあてのないらしい人達と一緒に、半径300メートルぐらいのところに休んだり歩いたりとうろついています。兵隊や救護班員らしい人が、何人か私に話しかけてきました。耳が聞こえないと言うと一様に首をふり、またはかしげ何か言いながら去って行きました。翌日工場で一緒の人二人に出会いました。一人は顔が二倍近くはれあがり、目は糸のように細く鼻血を流し、いま一人は頭をポロ布で包み顔はただれて工場で一緒の人とはわからなかったのですが、私の顔が汚れていてもふだんの顔でしたので二人の方から話しかけて来てわかったのです。

その二人の身ぶり手ぶりや地面に字を書いている話では、工場では五十人ほど働いていましたが、寮のおばさん三人、5メートルほどはなれた工場主の自宅の家族五人と私たち三人を除いて、即死または翌日の朝までに全部死亡したそうで、話してくれた二人も、他の同じような症状の人の例

から考えて数日後には死亡してしまっただろうと思います。

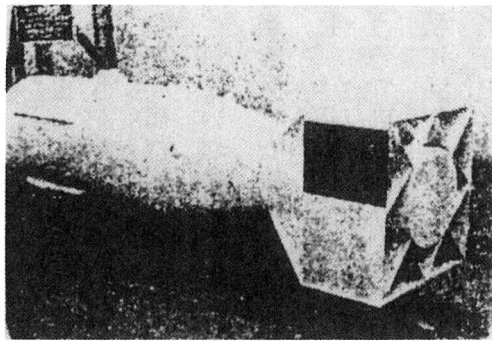
三日目の夕方、山口県方面へ行くトラックに乗せてもらいやつと広島市を脱出しましたが、三日間のあいだに沢山見た地獄絵のような悲惨な状況は、三十七年を経た記憶もあいまいになった現在では書きあらわすことはできません。

しかし、一つだけ忘れられないことがあります。近くの太田川で水遊びをしていた子供達の死体です。当時大きな子供は勤労奉仕に狩り出され、少し小さい子供は学童疎開で田舎のお寺などに合宿していました。川に沈んでいた子供達は小学校にも行かないような子供が殆んどでした。

死体の色というものは蒼白いのが普通ですが、子供達の死体はうすいピンク色でした。原爆の熱線で川の水が煮えたぎり、人間のゆでものの感じでそのような色になったのだと思います。

その子供達の死体は、兵隊などがトビ口でひっかけて集め、他の死体とともに原っぱに積みあげ、重油をかけて焼きました。その黒煙と悪臭は私が広島市を逃げ出したときもつづいていました。

戦後、時々病院に行くことはあっても、腹が痛い程度で寝込んで仕事



広島に投下された原爆「リトルボーイ」

生活は非常に苦しい状態にあります。被爆者としての生活援護は全くありません。辛うじて医療費が無料なものと、健康管理手当が月額二千四百円（八月現在）支給されるだけです。この手当も実際健康を管理維持するには足りない額です。

を休むということもなく、比較的平穩無事に暮してました。ところが、昭和三十六年九月少し腹痛があって大阪赤十字病院に行き順番を待っているときに目まいがして卒倒しました。そのまま入院し検査の結果、自律神経失調症ということでしたが、なかなか治癒しないので再検査を受け、椎間板ヘルニアとのことで、三時間かけての摘出手術を受けました。

翌年一月に退院しましたが、体調がおもわしくない、疲れ易い状態で9月に再入院しました。結局、五回の入院退院のくり返し、延二年間の病院暮らしの末仕事ができない状態になって現在に至っております。

私は小学校入学直前の六才のとき、カゼが昂じて中耳炎になり、両耳とも全く失聴しました。その時点ではろう学校の存在を知らないまま、学齡前の子供達と遊んだり、父が文字を教えてくれたりしておりました。

十才のとき

広島市に県立ろう学校があることがわかり入学しまし

たが、一学期がおわって夏休みになったとたん父が病に倒れましたので、山口県宇部市で働いていた長兄のところで暮す

ようになりました。兄は当時二十一才で父の医療費や私ともう一人の弟（私には兄）を養うだけでも精一杯、当時義務制ではなかった費用のかかるろう学校にはとても行かせ

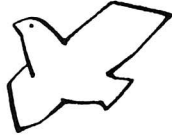


ちちをかえせ ははをかえせ
としよりをかえせ
こどもをかえせ

わたしをかえせ わたしにつがる
にんげんをかえせ

にんげんの にんげんのよのあるかぎり
くすねぬへいわを
へいわをかえせ

峠 三吉



られない状態で、ろう学校は一学期きりで退学しました。

私もろうあ者として種々様々な差別や迫害を受けてきました。このことと、ろう学校が義務制になれなかったのは、軍人でない者、なれない者は一人前の人間ではない、教育など不要との当時の思想が根幹にあったからだと思います。私が戦後、ひがむこともなく、どうにかまともに生きてこられたのは、ある時、耳が聞こえないのは体の一部に故障があるだけの事で、人間としての本質的なものは何等かわりはない、敗戦によって軍人でないものは人間でないなどの考えは通用しなくなったのだから、これからは人間としての自覚を持ってどう生きて行くべきかを考えてゆけ、と教えられたからです。

歴史の真実をゆがぬ、戦争を賛美するような教科書で子供達が教育されたらどうなるでしょう。軍人でない者、なれない者は人間でないとの思想が再びはびこるでしょう。そうなれば、まっ先に差別や迫害を受けるのは、ろうあ者も含めた障害者であることは間違いありません。（ほり ときお||現在、大阪ろうあ協会

で活躍しておられる。）

